

2026 年（令和 8 年）8 月校長メッセージ「What's going on?」

両国附属中学 3 年生全員で行くアメリカ・ユタ州での研修旅行は、今年も無事終了し、7 月 29 日に帰国しました。

都立中高一貫教育校は、どの学校も夏休みや春休みなどに、アメリカやオーストラリアなどへ研修旅行に行っています。両国は 10 年以上、中学 3 年生が海外研修でアメリカ・ユタ州に行くことになっています。ユタ州のソルトレイクシティ近郊のプロボという街にあるブリハム・ヤング大学（BYU）と連携し、生徒たちはホームステイをしながら大学に通い、大学生から英会話を教えてもらいながら、大学の施設を使った体験をしています。私も昨年に引き続き、今年も中学 3 年生と一緒に BYU に行ってきました。アメリカの大学の規模の大きさに驚くとともに、大学の地域社会との関わりの深さや、大学自身の通学生だけでなく、入学年齢に満たない若者たち、小学生から高校生までの若年層への熱心な教育や、健全に育成しようとする強い意欲を有していることに感銘を受けました。BYU では、この夏休み期間に、両国のような海外からの英語研修キャンプ、様々な種目のスポーツキャンプ、キリスト教の一派であるモルモン教の宣教師になるためのキャンプ、BYU に入学を希望する高校生のためのテストを受けるキャンプ、ボランティアや芸術的な活動を行う生徒のためのキャンプなど、色々なプログラムが実施されていて、夏休み中であるにもかかわらず、広大なキャンパス内の施設は様々な若者たちでごった返していました。

BYU のあるプロボという街は学園都市のような趣があり、BYU の学生たちは街の人たちからとても大切にされている印象があります。街を歩くと、レストランでは BYU の学生に割引制度があったり、公共の交通機関が無料であったりと、様々な応援を受けています。スポーツキャンプやテストキャンプでは、スポーツや学力に優れた高校生がセレクトされ、奨学金等の制度を利用して大学に入学を許可されるようなので、こうした夏休み中の大学でのキャンプが、大学への自分の売り込みになっています。そうした点は、日本の大学の推薦制度とアメリカの大学の選抜制度の大きく異なることだと感じます。したがって、多くの若者たちやそれに付き添いの大人たちが大勢街にいて、街の人たちは BYU の学生にはまだなっていない若者をはじめとする、見知らぬ人との交流を行っているものと想像します。

アメリカはとても広い国で、それぞれの州や地域によって街の様子は色々だと思いますが、見知らぬ人同士が出会ったときに自然に話しかけ、「Nice to meet you.」と言いかうことが当たり前のように行われている国であるように感じます。今回が 2 回目ということもあり、私はプロボの街を自由に歩き回りました。ユタ州は私が感じる場所では経済的にも豊かな地域であり、とても安全で、安心して散歩することができる場所です。日中は 40 度近くになり非常に暑いため、私以外にあまり歩いている人はいませんでした。住宅街を歩いていると、行き会った人のほとんどから「Hi!」や「Hello!」と声をかけられました。もちろんそれに対しては「Hello.」と返しましたが、よくある会話のパタ

ーンとして、その後に相手のアメリカ人から「What's going on?」と声をかけられることが非常に多くありました。この「What's going on?」を日本語訳すると「調子はどうだい?」くらいの意味で、「How are you?」とほぼ同じような意味のようですが、「調子はどうだい?」のような軽い感じの問いかけ以外にも、重大な事態の際に状況を相手に尋ねる場合にも使われることがあるようです。また、私がアメリカで受けた印象では、「What's going on?」は初めて会う人に「元気かい?」と尋ねるときに使う言葉であり、同様に使われる「How are you?」は知っている人や顔見知りを使う言葉であるように感じました。この使い分けの理解はあくまで私の印象なので、正しいかどうかわかりません。

「What's going on?」と尋ねられた時には、「とってもいいよ」というようなニュアンスの言葉を返し、その後に「どこから来たんだい?」や「どれくらいこの街にいますか?」と聞かれて会話が展開し、コミュニケーションをとって会話が弾むこともありました。

この「What's going on?」という言葉が、今回のアメリカ研修で最もアメリカ的な表現だと強く印象に残った言葉です。

この稿を読んでいる方の中には、アメリカに長く滞在された方もいらっしゃると思います。アメリカ人は私たちが想像する以上に「Thank you.」や「Sorry.」を様々な場面で頻繁に多用します。その使い方は、私たちが会話の中で「ありがとうございます」「申し訳ありません」「よろしくお願いします」と使うよりも、もっと軽くて気軽に用いられているようなニュアンスを感じます。おそらくそれは、アメリカの社会が海外からの移民や異文化を受け入れて成り立ってきたという経緯があり、互いに言葉を発して自分が害をもたらないこと、悪意をもっていないことを言葉できちんと相手に伝え、また相手も同様に自分に害をもたらないことを確認する文化が成立しているからだと考えます。

日本社会は、住んでいる地域の人、家族や親族といった身の回りの人、同じ学校や職場の人など、同じコミュニティに属するよく知っている人とは挨拶を交わし、何気ない気配りをする文化を持っています。「おはようございます」「ありがとうございます」「よろしくお願いします」こうした言葉を私たちはよく使いますが、自分の家のそばを歩いている見知らぬ人に「おはようございます。元気ですか?」とは言いません。自分が犬を連れて散歩する公園に外国人がいたら、「こんにちは、調子はどうだい?」と絶対に声をかけることもありません。

今回のアメリカ研修旅行で私が強く感じた日本とアメリカの文化の違いはまさにこの点です。日本には今、大勢の海外からの旅行者だけでなく、働き手として定住する人も海外から入ってきており、最も海外からの定住者が多いとされる予測統計によれば、2040年には日本の人口の10分の1（1000万人規模）が外国人になるとされています。公的な国の予測統計でも2070年には同様の規模になるとされていて、全く言語や文化、歴史などのバックグラウンドが異なる人たちがこの国で一緒に暮らしていく時代がすぐそこにあり、日本社会がアメリカと同様の移民社会になっていくと考えてほぼ間違いのないようです。

「What's going on?」を会ったことがない、見知らぬ人にも使うことができるメンタリティーが、私たちに求められているのではないか。そうだとしたら、日本の若者たちに、見知らぬ人であっても挨拶を交わし、コミュニケーションを取る力を育てなければならない——そんなことを強く感じています。

しかし、日本の学校では、地域によっては「見知らぬ人に挨拶をしてはいけない」と子どもたちに教えています。過去に小学生が知らない大人に善意で挨拶をして、その大人から暴行を受けたという事件がありました。また、小学生が知らない人から声をかけられ、少しでも挙動不審な様子があると、不審者情報が区や市の防犯メールや警察の防犯情報として地域の保護者に連絡が回ります。知らない外国人から声をかけられ、少しでもおかしい挙動があっても同様に不審者情報や防犯情報が地域に共有されます。子どもを守るために当然のことではありますが、「What's going on?」とこれまで会ったことがない人に気軽に尋ね、その人が害のない人で悪意をもっていないことを確認するメンタリティーを育てることにはつながっていないように感じます。

どこで折り合いをつければいいのか、どういうやり方が子どもたちの成長にとっていいのか、そんなことを考えさせられるアメリカ研修旅行であったと考えています。

過去の校長メッセージ

2026 年 7 月校長メッセージ	「両国ご近所の博物館」
2026 年 6 月校長メッセージ	「都立中高一貫教育校の選び方」
2026 年 5 月校長メッセージ	「おいしい甘酒の作り方」
2026 年 4 月校長メッセージ	「Memory of Mankind」
2026 年 3 月校長メッセージ	「時間について考えたこと」
2026 年 2 月校長メッセージ	「キャリア教育優良校文部科学大臣表彰受賞について」
2026 年 1 月校長メッセージ	「ガザのお父さんからの日本の中高生へのメッセージ」
2025 年 12 月校長メッセージ	「唐獅子さん」
2025 年 11 月校長メッセージ	「カーボンリサイクル」
2025 年 10 月校長メッセージ	「辞書を食べる」
2025 年 9 月校長メッセージ	「恐竜の死体が化石化するプロセス」
2025 年 8 月校長メッセージ	「グラフを発明したのは誰か」
2025 年 7 月校長メッセージ	「早朝の両国にいるオナガは一体どこから来るのか」
2025 年 6 月校長メッセージ	「現代社会における覇道と王道」
2025 年 5 月校長メッセージ	「おいしいラッシーの作り方」
2025 年 4 月校長メッセージ	「『NEXUS 情報の人類史』を読んで考えたこと」